

お産のお話し

副院長(兼)産婦人科主任診療科長
飯田 俊彦

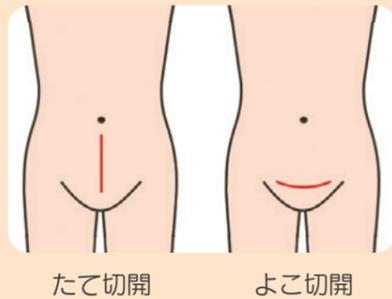
はじめに

医学の進歩や時代の流れとともに、出産方法もさまざまに変化しています。今回は、お産の歴史をたどりながら、当院では現在どのようにしてお産が行われているかを概説したいと思います。

お産の歴史

太古の昔、わたしたちの祖先であるサルは、猛獣の急襲を避け、太い枝の上にたつたひとりの力で赤ちゃんを取り上げていたようです。お産がものすごく楽だったんですね。その後、長い時の進化を経て人類が誕生すると、ヒトの出産は著しく体力を消耗したので、現代の助産師のようにお産の手助けをする者がどうしても必要となったのです。そして古代の出産体位は洋の東西を問わず、すべて中腰か立ったままの上体を起こした姿勢でした。なぜなら、胎児の娩出には大きな力を要するため、少しでも重力の力を借りようとしたのです。しかし、どうしても難産の問題を解決することはできませんでした。そこで登場したのが、「分娩鉗子」だったのです。

帝王切開分娩



歴史上初めて帝王切開手術が行われたのは、文献によれば1610年です。もちろん麻酔などない時代ですから、恐ろしいことに無麻酔だったはず。さらに当時帝王切開をするということはほぼ“死”を意味しており、1887年の先進都市ニューヨークですら、なんと92%の母体死亡率でした。現在は麻酔法も手術手技も大きく改良され、帝王切開手術自体は比較的簡単な手術に属し安全に行われるようになりました。麻酔方法は麻酔薬の胎児への移行を避けるため、下半身麻酔が主流です。

無痛分娩



西洋先進国は、人に痛みを我慢させることは非文明的だと考えているようです。出産についてもそのような理屈から、硬膜外麻酔とよばれる下半身麻酔による無痛分娩が当たり前に行われています。逆にわが国では、出産に関して自然であることが美德とされる文化が根付いており、それほど普及していません。当院では、必ずしも希望者全員に実施することはできませんが、条件が整えば可能ですので主治医と相談してください。

アクティブバース



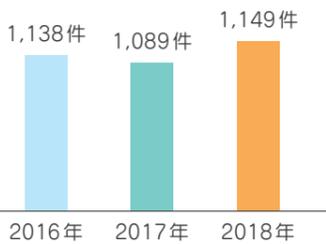
アクティブバースとは、お産において行き過ぎた医療介入を嫌う自然分娩志向の女性たちが提唱した、分娩台を使用しない自由な体位での出産方法です。当院では主に合併症のない妊婦を対象に、『バースセンター(9階北病棟)』で行っています。

当院でのお産の特色

当院は、地域周産期母子医療センターとして高度医療を必要とする合併症を有する妊婦から、妊娠経過が良好な自然分娩志向の妊婦まで、さまざまな分娩方法に幅広く対応しているのが特色です。NICU(新生児集中治療室)・産科病棟だけでなく、分娩台を使用せず自然分娩を行うバースセンターも併設されています。また、母乳育児などの産後のケアにも力を入れており、妊娠・出産・産後の各時期に一貫してサポートしています。

できるだけみなさまのご希望に添えたいと考えておりますので、外来担当医もしくは助産師に遠慮なく相談してください。

年間 1,000~1,200 件!



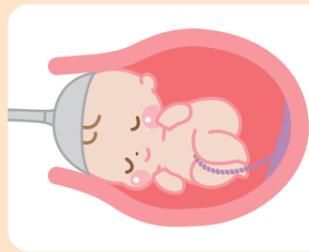
当院の分娩件数

かんしぶんべん 鉗子分娩



分娩鉗子は17世紀初頭のイギリスで最初に作製されてから、これまでに数えきれない母児の命を救ってきた医学史上の大発明です。日本へは鎖国時代シーボルトが長崎に持参して初めて紹介されました。現在でも当時の原型をほとんど変えずに使用されており、今なおとても有用な器具なのですが、使いこなすには知識と技術が求められるため、次第に経験の浅い医者でも使いやすい『吸引分娩』に取って代わられるようになりました。

吸引分娩



吸引分娩は吸引カップを吸盤の要領で児頭に密着させて引くだけの比較的簡単な手技であり、危険性も低く、現在世界中の臨床の場で使われています。ただ牽引力に限界があるため、いきみに合わせて医療者がお腹を圧迫する作業も同時に行われることが多いのです。